

文学講義ノート

知性の否定と肯定

W.ワーズワスの「賢明な受身」の一解釈

井 田 俊 隆

目 次

- 1 知性の落とし穴 書物は何を教えられないか。
- 2 よろこび 見よ、破れ壁のペンペン草を。
- 3 美の手続き 人間はいかにして自然に融合できるか。

今回のテーマは「自然と人間」です。自然と人間はそもそもどういう関係にあるのか、したがって人間はどのように生きたらよいのか、そうした根本的な問題を私なりの流れで考えてみたいと思います。

このテーマは少しも目新しくはなく、むしろありふれています。大学の講座でもあちこちの市民講座でもよく見かけられます。昨今は、とみにクローズアップされてきた環境問題を背景にひとつの社会現象になった感さえあります。その場合、ほとんどの議論が自然科学的アプローチといえますか、科学技術の発展との関わりで発言がなされています。私の場合、専門が文学ということで、そうしたアプローチとはちがったものとなりますが、まずはその点をご承知ください。と言いましても、そうした先生方の話と別個の問題を論じるわけではなくて、究極のところでは私の話も先生方の話も同じものであるということになると思います。むしろ、私たち文学者の文学的・哲学的論考こそが現在各所でおこなわれている議論の基本的問題を提供するのではないかと、少なくとも別角度からの問題提起ができるのではないかと、そんな自負すら感じております。

私はとくに19世紀イギリスのロマン派詩人ウィリアム・ワーズワスに関心をもっています。ワーズワスは一般に自然詩人として知られています。みなさんも中学校か高等学校時代の英語の教科書で彼の詩をひとつかふたつは習ったことがあるかと思います。このワーズワスという詩人は「自然と人間」の問題をどのようにうたっているのでしょうか。それを彼の詩、とくに短い、しかし重要な詩をいくつか取りあげながら、考えてみたいと思います。ちなみに、ワーズワスは『序曲』という1万行を超える長編詩でも有名ですが、平易ですぐれた短詩も多く、一般にはむしろこちらの方で親しまれています。日本でも、明治時代の北村透谷や国木田独歩などの文学者に大きな影響を与えたことで知られていますが、やはりそのころ主に読まれていたのはこうした小篇でした。

1 知性の落とし穴 書物は何を教えられないか。

ワーズワスに『忠告と返答』(*Expostulation and Reply*)という作品があります。タイトルはまことに散文的ですが、中味はすごいことを言っています。自然と人間の関係についてのワーズワスの考え方がよく出ている作品だと思しますので、この詩から入っていくことにします。

詩のスピーカーであるウィリアムとその友人マシューとの短い対話形式の詩で、冒頭マシューはウィリアムにこう呼びかけます。

Why, William, on that old grey stone,
Thus for the length of half a day,
Why, William, sit you thus alone,
And dream your time away?

ウィリアムは自然の中で岩に腰かけ、何もしないでひとりぼんやりしている。それを見てマシューは、それではまるで時間の無駄使いだとウィリアムの怠惰を責めます。そして次のようにウィリアムを諷めるのです。

Where are your books? that light bequeathed
To Beings else forlorn and blind!
Up! up! and drink the spirit breathed
From dead men to their kind.

ここでは書物というものが問題になっています。書物というのはいったい何なのでしょう。

人間は他の生き物とちがって、頭脳をもっています。それを知性と呼んでおきましょう。この知性でもって人間は真実を求めようとします。人間とは何か、^{いのち}生命は何のために与えられているのか、人生はどうあるべきか、と。有史以来人間はそういう探求をつづけてきたわけで、そうして学問・芸術など、幾百万巻の書物が生まれてきたのです。だから、書物は知性の輝きだと言えます。そこには人類の知恵のエキスが集積されており、光を放っているのです。

私たち人間は光がなければ生きていけない。真っ暗闇ではどう進んで行けばよいかわかりません。そんな時私たちを導いてくれるのが書物なのです。先人の遺してくれた書物の光に照らされることによって、私たちは生きていく方向がつかめるのです。そう信じればこそ、私たちは彼ら先人たちと同じように、真実を求めて学問をし、それがまた後人のための光にもなるわけです。

マシューが主張しているのはこういう知性の輝きなのです。知性への全幅の信頼が彼にはあります。そんなマシューから見れば、たしかにウィリアムは時間の浪費に励んでいる愚か者で、それではせっかく人間として生まれながら、少しも人間として生きたことにならないというわけです。

しかし、知性というのはそれでも問題はないのか。マシューの言うようにそれほど絶対的な信頼が置けるものなのか。そうとは言い切れない何かがあるのではないか。そういう懐疑が一方で残ります。

『忠告と返答』とペアをなすもう一篇の詩があります。『逆襲』(*The Tables Turned*)というタイトルの詩で、マシューにひどく叱責されたウィリアムが逆にマシューをやりこめて、議論の形勢が逆転するというものです。ここではウィリアムの方からマシューに呼びかけます。

Up! up! my Friend, and quit your books;
Or surely you'll grow double:
Up! up! my Friend, and clear your looks;
Why all this toil and trouble?

ウィリアムはぜんぜん書物に重きを置いていません。それどころか、書物を邪魔者扱いすらしています。真っ向からマシューの信奉する知性を否定するのです。この知性否定はどういう意味をもつのでしょうか。どのように知性が否定されているのか、その否定の仕方が大きな問題のように私には思えるのです。そこをどう押さえるかによって、これらの詩の作者ワーズワスがどういう詩人であったか　つまり、どういう思想をもって自然に接してきたか、どういう意味で自然詩人と呼ばれるのか　その辺の輪郭がはっきりしてくるようになります。

ひとことで言いますと、ワーズワスは知性そのものを否定しているわけではないということです。そんなことはもともと出来ない相談です。なぜなら、人間は知性をもって生まれついているわけで、他の生き物とちがって、それが人間が人間であるゆえんですから。それを否定することはとりもおさず人間そのものを否定することになってしまいます。知性そのものを否定するわけではない、それじゃ、知性とは何かと考えていくと、結局のところその限界につきあたってしまう。そうするともう知性に頼れない。知性以外の何かを頼りとしなければならないということになるのです。それがワーズワスの場合「自然」ということになるのですが、これは結論部に属する問題であって、まだそこまで一挙に話を飛躍させるわけにはいきません。ですが、とりあえずここでおさえておきたいのは、知性というものを一応認める、が、知性の本質を知ればその限界につきあたってしまう、そして否定せざるをえないという、そういう次元での知性の否定です。

では、話のスタンスを元に戻して、知性の限界とはどういうことか、そのところを少し立ち入って考えてみましょう。

たった今触れましたように、人間と他の生き物との根本的な違いは知性をもっているかかっていないかであると言うことができます。人間にはそれがあります。これは何を意味するかと言いますと、知性があることによって人間は物思うのです。つまり、自らに人生の意義を問うのです。何のために生きるのか、生命とは何か、と。いわば、もうひとりの自分がいるのです。

知性のない生き物たちは生きることの意味は問わない。それは問う必要のないこと、いうなればもう解決済みの問題なのです。自分は自分であり、また世界そのものなのです。人間だけが知性を有している分だけ問わないでは落ち着けないのです。つまり、真実を得たいと思うわけです。そして知性でもってそれを求めようとするのです。

ここで大きな問題に突きあたります。はたして、知性で真実は解き明かせるのでしょうか。

たしかに、知性は一定の何かを解き明かすのにたいへん役に立ちます。自然科学などはそういうものとして重要な意味があることは事実です。しかし、人生は何のためにあるのか、つまり人生の最終的な意味は何かという問題、それを私は生命の真実、世界の真実と呼んでいるのですが、そのところへ来ると知性は何も解き明かせないのです。

これまでもこの文学講座でたびたび触れてきたところですが、人生とか世界、あるいは生命(呼び方はちがってもいずれも同じものです)は不条理なあり方をしています。人間、最後は死にます。それならどうして生まれてくるのか。言ってみれば、死ぬために生まれてくるようなものです。端的に言えばこういうことになります。真実とはこの不条理をどうとらまえるかということなのです。それをとらまえなければ、あとの99.9パーセント世界が解明されたとしても何も解決したことにならないのです。最後の0.1パーセントのところでは知性は何も教えてくれないのです。世界の真実と人間の知性は水と油のようなもので、いくら私たちが知性を全駆動しても、世界はそれをはじいてしまうわけです。知性にはこういう限界があるのです。

以上、知性の限界について考えてきたわけですが、限界があるというだけならまだいい。知性にはじつはもうひとつ大きな欠陥があるのです。

知性は理論や分析を武器とします。理論にもとづかない知性というものは考えられません。ところが、この理論というやつはひとり歩きする性向をもっているのです。理論が理論を呼び、抽象が抽象を呼んで暴走していき、現実世界(つまり人生)からどんどんかけ離れていくわけです。前期の「知性の悲劇」の章で詳しく論じましたように、たとえば『カラマーゾフの兄弟』のイワンのように、見えないものが見えたり、逆に見えるはずのものが見えなくなったりとか、そんな観念だけの世界に遊離してしまうことになります。これでは何のための知性かということになります。本来、真実を求めめるためのものであった知性が真実の探究から大きく逸れてしまつて、知性のための知性と化してしまします。知性とはこういう暴走の危険性というが落し

穴もっているのです。『逆襲』の次の詩行はまさしくこのことを言っているのです。

Our meddling intellect
Mis-shapes the beauteous forms of things:
We murder to dissect.

以上、知性の限界と暴走性というふたつの弱点を考えてみたわけですが、マシューに反論するウィリアムの知性否定にはこうした知性の弱点に対する見究めがあったと私は考えています。真実を求めるにはもはや知性では間に合わない、どんな聖人・賢者の書物を読んでも何も得られない、それどころか、これ以上進めばまちがった方向に行ってしまうのだと、このようにウィリアムは知性に頼ることを放棄したのです。

ここでひとつ忘れてならない問題があります。それは知性を否定できるのは知性を知った者だけであるということです。ウィリアムも友人のマシューと同じように知性人なのです。ウィリアムというのは言うまでもなく詩人ワーズワスのことで、彼はケンブリッジ大学に進んで詩を学び、広く古典文芸やニュートン力学の世界にも強い関心を寄せていました。また進歩的知識人として、当時もてはやされたハートリ哲学やゴドウィニズムという政治思想に身を染め、さらにフランスの革命思想に走ったりしています。『序曲』の次の一節はこの頃のワーズワスをよく伝えていると思います。

A patriot of the world, how could I glide
Into communion with her sylvan shades,
Erewhile my tuneful haunt? It pleased me more
To abide in the great City....

X, ll.242-45 (1850).

「世界を祖国とする者（a patriot of the world）」として革命の成就を信じ、自然と交わるためにロンドンを捨てることをいさぎよしとしない青年ワーズワスの姿がほうふつとしてきます。これほどの主知派であったワーズワスことウィリアムが知性を否定しているのです。何も知らない者がやみくもに否定するのはわけがちがいます。この点を押さえておかないと、ワーズワスのこのふたつの詩『忠告と返答』と『逆襲』はとんでもない誤解を受けることになります。現に、そのように誤解されることが多いようですが。

じっさい、ウィリアムは知性の何たるかを知ればこそ知性に見切りをつけたのです。そうして、真実が訪れてくるのを待って、今自然の懐にいます。自然こそ生命の真実を教えてく

れるという信念が彼にはあるのです。だから、自然のただ中で夢うつつでいるのは、怠惰でも類廃でもなく、これこそが彼の真実探究の姿勢であるわけです。真実探究のために君は寸刻を惜しんで書物をあさっている、それと同じくらい自分も真実探究に懸命に励んでいるのであって、これはどうしてもやめるわけにいかない、だからもう問うのはよしてほしい、と言ってウィリアムは反論するのです。

2 よろこび 見よ、^お破れ壁のペンペン草を。

知性をきっぱり捨てて自然の中で真実を求めようとするウィリアムですが、そこでは何が得られるのか、それが次の問題です。

人間は自然の中に入っていくとどのような経験をするのか、ここを素朴に考えてみましょう。書物を捨てて、部屋から森へと出かけます。すると、森には光や露のうつくしさ、小川や樹々のさわやかな音、小鳥の鳴き声などが満ちあふれています。私たちはまずこうしたものによるこびを感じます。しかしこれは表象的・状況的なよろこびです。この時点ではまだ自分と自然との間には距離があります。

そのうちに、こうした感動を通して次第に森に陶醉していきます。身も心も奪われて、自分と森が一体化していく過程です。そこでは自然のすべてが快いものとして自分の体内に浸透していきます。この時に得るよろこび、それが真実 生命の真実 に直接つながっているのです。

ここでのよろこびをもう少し考えてみましょう。

花や小鳥たち、彼らは自然の中で作られたままにすくすく生きています。彼らの生き方は言ってみればそれだけのことです。書物や芸術があるわけではない。まして娯楽のための怪奇小説もテレビもない。ただ与えられた生命を精いっぱい生きていただけです。けれども、彼らの生きる姿にはすがすがしいよろこびが満ちあふれているのです。そのよろこびのさまをワーズワスは『早春』(*Lines Written in Early Spring*)という詩で次のようにうたっています。

Through primrose tufts, in that green bower,
The periwinkle trailed its wreaths;
And 'tis my faith that every flower
Enjoys the air it breathes.

The birds around me hopped and played,
Their thoughts I cannot measure:
But the least motion which they made,
It seemed a thrill of pleasure.

The budding twigs spread out their fan,
 To catch the breezy air;
 And I must think, do all I can,
 That there was pleasure there.

あるいは、もっと身近な例で言いますと、破れ壁やコンクリートの裂け目に咲くペンペン草。一週間も日照りが続けば枯れてしまう運命ですが、それにもかかわらず彼らはおおらかに花開いています。明日の朝煮られる運命のモヤシたちでさえいっせいに頭をもたげて合唱しています。これらはすべてよろこびの姿なのです。げらげら笑ったり歓声をあげたりはしませんが、彼らはみんなよろこびを表現しているのです。ワーズワスには野生の草花や小動物を扱った詩がたくさんありますが、それらはいずれもこのよろこびをうたったものとして読めます。みなさんもおそらくご存知ではないでしょうか、一般に「ラッパ水仙」(Daffodils)というタイトルで知られているあの有名な詩などもそうです。

ここで大事なことはよろこびとは生きることだということです。与えられた生命、それを精いっぱい生きることが即よろこびとなるのです。この生命の真実、これが森にはあるのです。ウィリアムはこのことを知っていたのです。それで彼は森に出かけ、自分が花であるように、あるいは小鳥であるように生きようとしていたのです。ところが、マシューにはそんなウィリアムが遊んでいるようにしか見えなかったのです。それはある意味では無理もないことではあるのですが。私たちは小鳥たちを見ればたのしそうに遊んでいるように思いますね。それと同じなのです。しかし、彼らは遊んでなんかいらない。生きるために精いっぱい飛び回っているわけです。

いずれにせよ、ウィリアムは自然の中で小鳥や花のように生きようとしているのです。そうすることによって、ほんとうのよろこびが味わえるからです。ほんとうの意味において生きていくことの充実感が得られるからです。これは知性ではけっして得られないものです。ウィリアムはこう言っています。

The eye it cannot choose but see;
 We cannot bid the ear be still;
 Our bodies feel, where'er they be,
 Against or with our will.

生きることの充実感というのは全身的なものです。目や耳やその他あらゆる感覚を通して感じるものです。知性はそうした人間機能のひとつにすぎません。だから、知性によって得られ

るものと言えばほんのわずかで、それだけではどういほんとうのよろこびは得られません。

このように、人間の体はあらゆる感覚で感じるように出来ているのです。そしてそれらをフルに稼働させるのは自然を措いて外にありません。自然に陶醉するというのはこの全身的感觉のフル稼働状態を言うのです。その時、ほんとうの生命活動(すなわち、よろこび)が得られるのです。これは何もむずかしいことではありません。なぜなら、小鳥や花など人間以外の生き物が毎日やっていることなのですから。

これほどたやすいことなのに、どうしてそれが人間にはできないのか。それはほかでもない、知性があるからです。人間はアダムとイブがあひの知恵のリンゴの実を食べて以来知性をもってしまいました。この点で人間は他の生き物と異なる存在となりました。つまり、自然から遠ざかってしまったわけです。

結局のところ、ワーズワスの知性否定の問題は言いかえれば、遠くなったこの自然との距離をどうするのかの問題になるかと思われまふ。この距離を埋めるのにどんな手だてが残されているのか。この問題について今度は美というものをめぐって私の考えを述べてみたいと思いまふ。

3 美の手続き 人間はいかにして自然に融合できるか。

ワーズワスは『忠告と返答』で自然のことを「この荘嚴な万象(all this mighty sum of things)」と呼んでいます。これはワーズワスの自然観を考える時のひとつのキー・ワーズになっているのですが、ただ、これだけでは表現が一般的すぎて、普通の読者にはワーズワスの意図が素通りしてしまふそうです。同じ趣旨のパセツジが『序曲』にありますから、それをここに引いてみまふ。

the one interior life

Which is in all things,... that unity

In which all beings live with God, are lost

In god and nature, in one mighty whole....

MS.RV (E.de Selincourt, *The Prelude* (Oxford U.P.), p.525.)

ワーズワスの思想は汎神論的だと言われまふが、これなどはそれを端的に表わしています。神と言うと抵抗を覚える人もあるかもしれまふませんが、それはひとつの表現方法であって、ワーズワスの場合、いわゆる神をかならずしも意味するものではありません。現にワーズワスはよく‘Being’という言い方で神を表現しています。「存在原理」、「創造原理」、あるいは今挙げた詩行の言葉を借りれば「生命の原理」と言えまふよいか、そういう概念でとらえればよいでまふ。

いずれにしても、自然にはそういう原理があって、それが万物に宿っているというのです。自然はいわばその‘Being’の息吹だというわけです。

ここで注目したいのは、ワーズワスはそのような自然のあり方を「統一体（unity）」としてとらえているということです。自然はすべてのものがひとつとなって、それが統一のとれた総体として厳かな姿をしていると言うのです。ワーズワスの詩集のどこを開いても、そうした自然の荘厳さに対する畏敬の念が満ちわたっています。彼の心をそれほど強く動かせたこの統一性をもった自然の荘厳さ、それはじっさいどんなものなのでしょう。私はそれを「自然の調和の美」という発想で解釈してみたいのです。

自然はすべてが完全に調和しています。完全な調和とは、平たく言えば、いっさいに余分がなく、かつ無駄がないということです。たとえば、春になったら花が咲き、それに蝶が寄ってきて花粉を運び、年々歳々花が開く、そのように自然は仕組みられています。秋には木が実をつけて種を大地に落とす、また枯れ葉が散って翌年の生命の糧となる。山には山の、野には野の生命が営まれ、それが相互無限に連関して、自然全体の調和をつくっているのです。そこにはいっさいの余分も無駄もありません。

これは全体の調和に限られません。個々の物においても、それぞれが小宇宙としてしっかりと調和を保っています。小鳥の羽を考えてみますと、私たちはあれをうつくしいと思います。形といい色といい感触といい、それをうつくしいと感じない人はいません。しかし、これは本来的には美のためのものではないのです。それらは、飛ぶためのもの、雌を惹きつけるためのもの、体温を保つためのものです。つまりは、生きるためのものです。生きるために必要なものであって、それ以上でもそれ以下でもありません。

花にしても同じです。つぼみや花びらの見事さ。萼や葉脈や棘、どこをとってみても見事な造形美をもっていて、だれが見てもいつも感心するばかりです。しかし、あれはそれ自体としては何も美のためのものではない。ただ、生きるためにそうなっているだけなのです。生きるのにいっさいの無駄や余分を省けばあのように見事な調和体が出来上がるのです。

このように、自然はあらゆる点で過不足のない調和的活動を続けているわけですが、これはあくまでもその生命維持のためのものであって、本来的には美とは関係がありません。にもかかわらず、人間はそれを美と感ずるのです。ここが問題なのです、というよりもここに深い意味があるのです。つまり、知性がここで深く関わってくるのです。

少し話を戻してみましよう。

人間以外の生き物、小鳥や花は自然の生命をそのまま自分の生命として生きています。自分の方の計らいは何ら要らない。生きることがそのままよこびとなるわけです。自然と自分の間には隔たりがなく、自分は即世界（＝自然）、世界は即自分であるのです。彼らは何の問題も抱えていないのです。生きるとはどういうことか、真実とは何か、そういう問題はおのずと解

決済みなのです。生きていてだけで生きたと感じられるのです。生地そのまま充実した生き方がまっとうできるのです。それに対して人間はというと、生きることがそのままよこびとならない。生きていてだけで生きたという充実感が得られないのです。

人間も、そもそもの動物的側面だけから見れば、小鳥や花と同じように何を見ても何を聞いても、すなわち生きていてというだけで、よこべるようにつくられているはずなのですが、知性という側面を否応なくもってしまった。そのために、自然の中であって、目があっても見えないし、耳があっても聞こえない、つまりはよこべないようになってしまっているのです。先ほど小鳥や花のよこぶさまを『早春』から引用しましたが、その後次の4行がつづいていきます。この最後の1行は今述べたような人間の存在論的な不幸に言及したものと解釈できます。

If this belief from heaven be sent,
If such be Nature's holy plan,
Have I not reason to lament
What man has made of man?

これはたしかに嘆かすにはおれないことです。人間も自然の一員であることに変わりはなく、その中で生きていかなければならないわけですから。では、知性がある分だけ自然から隔たったこの距離、それをどう埋めればよいのでしょうか。その答が美なのです。美こそ自然と人間を結びつける接点なのです。それによって人間は自然と一体化できるのです。

厳かな自然の調和を見て、それを美と感ずること、これは自然と同化・融合するために人間だけが踏まなければならない手続きであります。残念なことではありますが、それは致し方ありません。ですが、そう悲観的になることもないと思います。たしかに、一面ではそうありますが、逆に見ればこの手続きは人間にしかないものです。

知性というのはまことに妙なもので、それがあつたために私たちは自然から距離ができたのですが、それを埋めることができるのも知性なのです。どういふことかと言いますと、美というのは人間だけがもつているものなのです。人間だけが物をうつくしいと感ずることができます。そして、美に感動するといふこの感ず作用はとりもなほさず知性によつてなされるのです。知性抜きでは自然の荘厳への畏敬の念は生まれません。その意味で、知性は両刃の剣だと言えましょう。人間の弱みであつた知性が自然融合のための強い武器となるのです。結局、人間は他の生き物が生きなかつたものを知性によつて、つまり美を感ずることによつて、生きることができるのです。私たちの人生はそういう付加価値があるのです。そして、皮肉なことに、この付加価値の部分が人間を人間たらしめるのです。

ここで、もう一度最初の問題にもどってみます。マシューはウィリアムのことを本も読まずに森の中で一日中夢見るように遊んでばかりいると非難するのですが、そのマシューに対してウィリアムは次のように言い返しているところがあります。

Nor less I deem that there are Powers
Which of themselves our minds impress;
That we can feed this mind of ours
In a wise passiveness.

Think you, 'mid all this mighty sum
Of things for ever speaking,
That nothing of itself will come,
But we must still be seeking?

ウィリアムの言い分は、要するに、自然はその調和の美を通して私たちを感動させようと不断に語りかけてくれているのだから、私たちの方はただ待っておりさえすればよいのだということです。こう言いますと、マシューならずともずいぶん消極的に聞こえます。が、はたしてそうでしょうか。というのは、ここにはひとつの条件が出されています。「賢明な受身（wise passiveness）」で待たなければいけないと言うのです。この点を見落としてはいけません。

この言葉は何を意味するのでしょうか。これはワーズワスのもっとも有名な言葉のひとつで、この詩だけでなく、ワーズワスという詩人を論じる時、欠かせない文句としてよく引き合いに出されます。私はこれを知性との関連で解釈しています。

「受身」というのは私たち人間側の計らいをなくすということです。計らいというのは知性のいたすところですから、これは知性の否定を意味します。私のこれまでの言い方に直せば、知性の限界を知り、それに頼ることをやめるということになります。そのようにいったん知性を否定する立場がこの「受身」によって示唆されます。その上で、今度は何ができるのか、あるいは何をすればよいのか。それが「賢明」に関わる問題です。つまり「賢明」な待ち方ということになるのですが、これはどういう待ち方なのでしょうか。

「賢明」と言うからにはそこに人間側の判断という働きかけが示唆されています。それが上で述べた両刃の剣としての知性のもう一面のことだと私は考えています。人間を人間たらしめる強みとしての知性、そういう知性の肯定面から待つということです。そういう待ち方でなければ人間としてはほんとうに待ったことにならないわけです。知性の否定だけなら人間否定になります。それは人間に小鳥や花になれと言うことであり、そんなことはできるはずがあり

ません。先ほど私は、ワーズワスは小鳥や花のように生きようとしたという言い方をしましたが、あれは、小鳥や花のようであったらとか、彼らのように作られたまま生きられたらとかいう単純な願望ではなくて、人間が知性によってオーヴァーランしたところを否定し、その上で人間にしかないこの知性の肯定面を活かし、それによって自然への融合をはかろうというものです。この「賢明な受身」という言葉は、そのようにして自然の受容を懸命に努めていたワーズワスの積極的な待ち方を教えてくれます。

ワーズワス当時、知識人は詩人も含めてだれもが大都会ロンドンを目指しました。すでに紹介しましたように、ワーズワスも彼らと同じようにケンブリッジでの大学生活やロンドンの都会生活を経験しています。また、その若さからフランス革命に共鳴し、理想社会の実現に情熱を燃やしました。しかし、彼はまもなく都会生活に幻滅し、革命思想にも失望して、ロンドンからはるか離れた田舎へと戻っていきます。このあたりにも知性否定に傾いていった若き日のワーズワスの苦悩の跡が窺えると思うのですが、そうして戻ってきた西部地方の片田舎のレースダウンや北国の湖水地方で彼はこの「賢明な受身」という自然の受け入れ方を学んだのです。そしてそれによって自らの精神的危機を脱することができたのです。その後の彼は都会には見向きもせず、もっぱら自然を友とし、その懐での充足した詩人生活に入っていました。先ほどの詩行をもじって次のように言えば、この頃のワーズワス いわば新生ワーズワスを伝えることにならないでしょうか。

A son of Nature, how could I go back
 Into communion with the City's dens,
 Erewhile my intellectual haunt? It pleased me more
 To abide in the tuneful nature.

ちょうどウィリアムが書斎に戻ることを拒んだように、ワーズワスにとっては、今さら快い自然を捨ててロンドンに戻るなど、論外だったにちがひありません。

最後に、『忠告と返答』と『逆襲』に登場するふたりのスピーカーのモデルについてですが、ウィリアムがワーズワス自身であることは今さらくり返す必要もありません。それは問題ないのですが、マシューの方はだれなのか、これがしばしばワーズワス学者の間で取り沙汰されません。

私はこのモデル問題にはあまり気をとめないようにしています。というのは、それがだれであれ、ワーズワスがマシューという人物を登場させることによって読者に訴えようとしたところははっきりしているように思われるからです。ひとことで言って、マシューは当時の知性人一般を代表していると考えればよいと思います。当時のイギリスは、産業革命を経て社会的に

も経済的にもますます上昇気運にあり、どちらを向いても合理主義・知識優先の時代でした。そんな風潮の中、人びとの心が物質的な豊かさとは裏腹にどんどん貧しくなっていくのをワーツワスはつぶさに観察していました。ウィリアムのマシュー批判はそうした世情に的を絞ったワーツワスの社会批判であったことはほぼまちがいない、それがこの詩のファイナル・メッセージとなっているのです。

ワーツワスのこの批判、今日の私たちのところまで届いてこないでしょうか。

ワーツワスが生きたのは18世紀から19世紀にかけての産業革命後の激動する世紀の移り目でした。それからちょうど200年後、私たちも今20世紀から21世紀への移り目に生きています。今日の科学技術の発展はとどまるところを知らず、新世紀を迎えてますます先鋭化しています。科学技術の立国理念が尊ばれ、経済や教育、その他あらゆる分野で、人々の意識はいやおうなく知識偏重、技術優先へとなびいていきます。現代がどんな時代か、それをここで詳しく論じるつもりはありませんが、こうして見ただけでもウィリアムの批判はそのまま今日の私たちに向けられていると言えそうです。マシュー vs ウィリアムの論戦は今も延長戦がつづいているのです。ウィリアムに批判されるマシューは私たちひとりひとりなのではないでしょうか。みなさんも、今一度自分の中のマシューに気づき、あらためてウィリアムの批判に耳を傾けてください。